放課後変身部のヒミツ②

～恋に友情、真夏のココロは大忙し!?～

八星こはく・作

ななミツ・絵

アルファポリスきずな文庫

もくじ

プロローグ　学校を飛び出して …… 006

第一章　準備も含めて夏合宿です …… 013

第二章　恋と友情って、違うもの？ …… 025

第三章　合宿が終わっても …… 039

第四章　今度は、私達が背中を押す番！ …… 052

第五章　夏祭りダブルデート♥ …… 071

第六章　優斗くんのこと、好きだよ（早瀬葵視点） …… 085

第七章　恋に障害はつきもの？ …… 098

第八章　頭の中は、優斗くんのことばっかり（早瀬葵視点） …… 110

第九章　変わったのは、私 …… 127

第十章　変わってしまうもの …… 143

第十一章　我慢するのは、もうやめる（早瀬葵視点） …… 155

第十二章　これからも友達 …… 168

第十三章　文化祭当日 …… 185

第十四章　伝えたい気持ち（早瀬葵視点） …… 192

エピローグ …… 209

登場人物紹介



天野 望結

あだ名が「委員長」の
中学二年生。
「委員長」としての自分も
大切にできるようになった！

天使 もも

望結の「変身」した姿。
かわいいものが
大好きで、
ちょっぴりあざとい。

早瀬 葵



望結と同じクラスの
人気者男子。
お姉ちゃんとちょっと
ぎくしゃくしている
ようで……？

如月 優斗

姫乃のクールな従兄。
葵から猛アタックを
受けている。



如月 姫乃



望結の親友。
少し気弱だけど、
変化があって……？
実はコイバナも好き。

放課後変身部のメンバー

西園寺 怜音



葵の「変身」した姿。
オッドアイのダウナー男子
な見た目は雪の好みに
合わせているよ！

佐倉 雪

優斗の「変身」した姿。
クールな美少女だけど、
照れやさん。



月城 蓮



姫乃の「変身」した姿。
キラキラな王子様
みたいな見た目！

放課後変身部のルール

1. どんな格好をするか自由！
2. 部活中は「部活ネーム」で呼び合う！
3. いつ来ても、帰っても、何をするのもOK！
4. 他の人には変身部のことは絶対ヒミツ！

プロローグ　学校を飛び出して

あと四回眠ったら、待ちに待った夏休み。
私、天野望結が所属する緑光学院中等部のみんなも夏休みに向けて浮かれている……わけなんだけど、今だけはちょっぴり、教室の空気が硬い。
「出席番号順に成績表を渡すので、順番に取りにきてください」
今日は、一週間前にあった期末テストの成績表が返される日なのだ。
大きなミスはしてないし、いつも通りやれたはず。でも、やっぱり不安はある。
入学してからずっと、私はテストで学年一位を取り続けてきた。周りの子はきっと、今回も私が一位だって思っている。
がっかりされたくない。それに、『真面目な委員長』として私が積み上げてきたものも、私はちゃんと大事にしていきたい。

だから今回のテストは、私にとってもすごく大事なテストだった。
「はい、天野さん」
先生に渡された成績表をゆっくりと開く。
そこに書かれていた順位は――学年、一位。
ほっとして全身の力が抜ける。
自分の席に戻ってのんびりしていると、背後から明るい声が聞こえた。
「さっすが委員長」
「……早瀬くん、勝手に人の成績表見ないでよ」
「いいじゃん、俺達の仲なんだし」
あはは、と笑うのは早瀬葵くん。学校一モテる爽やかイケメンだけど、三年生の如月優斗くんに強烈な片想いをしている。
「ご、ごめん、望結。私も見ちゃって……」
早瀬くんの後ろから、ぴょこっ、と姿を現したのは如月姫乃。
私の大好きな友達だ。
「姫乃はいいよ！　全然、気にしないで」

「うわ、差別だ差別」
「区別だから」
わざとらしく唇をとがらせる早瀬くんを無視して、姫乃に向き合う。
「それで、姫乃はテスト、どうだった……？」
今回のテストは、もちろん自分の結果も不安だったけれど、姫乃のことが心配だった。姫乃はつい最近まで保健室登校をしていたこともあって、あんまりテストに自信がないみたいだったから。
「ぎりぎりだけど、赤点回避したよ」
成績表を見せながら姫乃が微笑む。
「よかった……！」
「望結が教えてくれたおかげだよ。ありがとう」
「私でよければいつでも教えるから。任せて」
勉強は私の得意分野だ。
得意なことで姫乃を支えられるなら、私にとってはすごく嬉しい。
「ちなみに俺は、優斗くんに教えてもらった数学だけ八割超え」



どや顔で会話に割り込んできた早瀬くんの成績表を覗き込む。
本人が得意げに話した数学以外の科目も全て平均点を上回っていて、総合順位は三十二位。
二年生の数が百五十四人だから、わりといい順位だ。
「早瀬くんもすごいね」
姫乃が褒めると、早瀬くんは複雑そうな表情になった。
「みんながそう言ってくれたらいいんだけどね」
「え？」

「両親にはどうせ、呆れられるだろうな」
あはは、と明るく笑いながら、早瀬くんは成績表をクリアファイルにしまった。
そういえば、早瀬くんの家族の話って、全然聞いたことないかも……

「委員長、如月さん、今日も行こ！」
ホームルームが終わると、早瀬くんが満面の笑みを浮かべながら私の席にやってきた。私も急いで荷物をまとめてから立ち上がる。
「うん、準備できた……あっ」
立ち上がった瞬間、不意に美術部仲間の琴音と目が合った。だけど、声をかける前にすぐ、目を逸らされてしまう。
「望結、どうかした？」
いつの間にか合流していた姫乃が不思議そうに私の顔を覗き込んでくる。
「あ、ううん、なんでもない」
……そういえば最近、琴音とあんまり喋れてないな。
ちり、と胸の奥がちょっぴり痛む。

その痛みを抱えたまま、私は放課後変身部の部室へ向かった。

「うー、今日も暑いっ!!　もも、暑すぎて溶けて、桃ジュースになっちゃいそう！」
「ももさんが溶けてしまったら悲しいよ。でも、確かに暑いね」
「本当に、暑すぎるっ！」
天野望結の時よりも数段高い声で文句を言いながら、私は部室のテーブルに突っ伏した。
その隣で、蓮さんがシャツのボタンを一つだけ外して、手であおいだ。素肌が少し見えて、とっさに目を逸らす。
――正体は姫乃だってわかってるけど、どきっとしちゃう。
放課後変身部。好きな格好をして、好きな自分になって過ごす部活。今日も私はピンク色のウィッグをかぶって、しっかりとメイクをして『天使もも』になっている。
今日の私も可愛い。だけど、可愛さを保つのが難しくなってくるくらい、部室が暑い。
部室には一応エアコンがついているけれど、古いからか効きが悪く、教室の何倍も暑いのだ。
「確かに暑いよね」
うんうん、と頷いたのは西園寺怜音くん。

オッドアイが特徴的な彼は、早瀬くんの変身部の姿である。
怜音くんはにこっと笑って、髪を耳にかけた。
「だからさ、本当に夏合宿しない？」
その言葉に、私と蓮さんが目を見合わせる。
少し前、みんなで夏休みに泊まりにいきたいね、という話をした。だけど私達全員が中学生なこともあって、具体的な話にはまだなっていない。
旅行ってことかな、と二人して怜音くんを見ると、彼は驚くような提案をした。
「俺の家の別荘とかどう？　実はもう、親には許可もらってて」
「「別荘っ!?」」
怜音くん――早瀬くんって、別荘を持ってるようなお金持ちだったの!?
驚いていると、怜音くんは隣に座る雪さんの肩に腕を回した。ほんの少しだけ嫌そうな顔をするものの、雪さんは怜音くんの腕をおとなしく受け入れている。
「実は俺、結構お金持ちなんだ。雪ちゃん、お金目当てでもいいよ？」
「……そういうの、自分で稼げるようになってから言うセリフでしょ」
呆れたように言った雪さんに、厳しいなあ、とでれでれした顔で怜音くんが応じる。今日も

今日とて、雪さんを見つめる怜音くんの眼差しは砂糖菓子のように甘い。
「でも、夏合宿っていうのはいいかも」
――こうして私達放課後変身部の、二泊三日の夏合宿が決定したのだった。

第一章　準備も含めて夏合宿です

「じゃあ、スケジュールはこんなところ……かな」
夏合宿の開催が決定してすぐ、私達は二泊三日のスケジュールを立てた。
移動時間も考慮した結果、一日目は食材の買い出し、二日目が海とバーベキュー、三日目が片付けと帰宅、という流れに決まった。
早瀬くんの別荘は海に近い避暑地にあって、一軒家なのだという。
「楽しみだね。俺と雪ちゃんの、記念すべき初お泊まりデート」
「変身部の合宿でしょ」
「デート兼合宿、ね」

浮かれた怜音くんが鼻歌を口にする。だけど気を抜いたらそれに共鳴しそうになっちゃうくらい、実は私も浮かれている。

だって、変身部のみんなで夏合宿なんて、絶対楽しいもん!!

今まで私は、学校行事以外で友達と泊まりで出かけたことがない。それどころか、遠出した経験すらない。だから、今回の合宿が本当に楽しみなのだ。

……だけど、一つだけ心配なことがある。

「二日目の海のことだけど……みんな、どうする？」

具体的なことを言わなくても、私の不安はみんなに伝わったらしい。

特に、一番心配なのは姫乃——蓮さんだ。王子様みたいに格好いい蓮さんに視線を向けると、蓮さんは私の不安を吹き飛ばすように微笑んでくれた。

「海だけは、いつもの姿で楽しもうか」

変身部の私達はみんな、ウィッグをかぶって、メイクを使って変身している。

でも、海にウィッグをかぶったまま入るのは難しいし、メイクだって落ちてしまう。

なにより、制服と違って水着だと、性別による身体の違いを誤魔化せない。

「いいの？」

「僕は構わないよ。変身部のみんなだからね」

蓮さんの言葉には私達変身部への信頼がにじんでいて、つい頬が緩む。

「ももは賛成！」

「俺も。俺はどんな雪ちゃんでも愛してるから」

「……私も別にいいけど」

言葉は人それぞれでも、みんなが普段の姿でも合宿を楽しもうとしていることが伝わってくる。

放課後変身部は、理想の自分になれる素敵な居場所。だけど、ここで出会った大好きなみんなとは、いつもの私でだって仲良くしたい。

「じゃあ決まりだね！　もも、すっごく楽しみ!!」

☆★☆★☆★☆★

早瀬くんの別荘は、私達が住んでいる場所から新幹線で一時間ちょっとの場所にある。

当日、あらかじめ買っておいた切符を持って、私達は駅に集合した。

今日は学校じゃないから、みんな思い思いの格好をしている。私は涼しさと可愛さを両立させた短い丈のレモンカラーのワンピースで、新しいサンダルを履いてきた。

蓮さんはショート丈のブラウスにパンツというシンプルな服装だけれど、真っ白で統一したコーデは洗練されていて、蓮さんの優雅な雰囲気に似合う。

雪さんと怜音くんは示し合わせたかのように、同じワインレッドの服を着ている。シミラールックコーデ、というやつだろう。雪さんはロング丈のワンピースで、怜音くんはロング丈のジャケットを羽織っている。

なにより派手な髪色をしているせいで、四人でいるとどうしても注目を集めてしまう。

だけど、今の私は『もも』だから。好きな格好をしていることに対して、堂々と胸を張っていられる。

せっかく可愛いのに、背中を丸めちゃうなんてもったいないもん。

「新幹線に乗る前に、お菓子でも買っていかない？」

そう提案してくれたのは怜音くんだ。

彼の提案に乗って、私達は駅内のコンビニに入った。

「……遠出するの、久しぶりなんだ」

レジ近くに置いてあった葡萄味のグミに手を伸ばしながら、蓮さんが柔らかく微笑む。

「久しぶりの遠出、ももさんと一緒で嬉しいよ」

「もっ……もう、蓮さんったら、もものことドキドキさせすぎだから」

「へえ。ももさん、僕にドキドキしたんだ？」

くすっと笑って、蓮さんが私の顔を覗き込んでくる。蓮さんの王子様ぶりにはかなり慣れてきたけれど、それでもいつもドキドキしてしまう。

「それよりお菓子、早く決めないと！」

「うん、そうだね」

熱くなった頬を隠すように、慌ててお菓子コーナーへ視線を戻す。

ちょっと悩んだけど、青りんご味のグミと梅味の飴を買うことにした。

「ももちゃん達も決まった？」

振り向くと、怜音くんがカゴいっぱいにお菓子を詰め込んでいた。ポテトチップス、ソーダ味のグミ、レモン味のタブレット、チョコレート……見ているだけでお腹いっぱいになりそう！

「そんなに食べるの？」

「もちろん」
満面の笑みを浮かべて怜音くんは頷いた。
怜音くんも私と一緒で浮かれてるんだなぁ、と思うとなんだか嬉しい。
別に、新幹線で全部食べられなくても、着いてから食べてもいいもんね。
せっかくだから、私もあと少し買っちゃおう。
目についたチョコチップのクッキーを手に取って、私はみんなと一緒にレジへ向かった。

「雪ちゃん、チョコ食べる？　はい、あーん」
新幹線が発車するとすぐ、怜音くんはチョコレートを雪さんに食べさせようとした。口の前に差し出されたチョコレートを、雪さんはなんのためらいもなく口へ入れる。



「……これ、結構美味しい。期間限定のよね？」
怜音くんは瞳を輝かせ、グッと手を握り締めた。
「俺、これ買い占めてくるね」
「そこまで刺さってないから」
なんて言うわりに、雪さんはまた口を開いてチョコレートを一つ要求した。そこに、あーん、と怜音くんが自然な動作でチョコレートを丁寧に入れる。
それを見て、蓮さんと目を合わせる。
なんやかんやいい感じだよね、この二人って。
雪さんに一目惚れした早瀬くんが、雪さん好みの『怜音くん』になって変身部に入部した。
その後、雪さんの正体が『如月優斗』という三年生の男子だと知っても、早瀬くんの恋心は変わらなかった。
どんどん二人は仲良くなっている気がするけど……実際今、二人ってどんな関係なのかな。
気になってじっと二人を見つめていると、怜音くんと目が合った。
怜音くんはわずかに目を細め、雪さんの肩をぐっと引き寄せる。
「ももちゃん。雪ちゃんのこと、あげないからね」



「私、別に貴方のものでもないのだけれど」
「寂しいこと言わないでよ。俺はもうとっくに、身も心も雪ちゃんのものなのに」
ねえ、と言って、怜音くんは雪さんの手を握った。見ているこっちが恥ずかしくなるほどの甘い空気だ。
「……も、到着までに胸焼けしちゃいそう」
「僕もだよ」
蓮さんと目を合わせて、くすっと笑う。いつもの部室を飛び出したここでも私達はなにも変わらない。
それが、すごく嬉しかった。

「ここだよ」
駅から歩くこと二十分。空気の澄んだ森の中に、一軒の家が建っていた。壁は真っ白で、屋根は深みのある藍色。洋館風の造りをしていて、絵本に出てきそうな雰囲気のある別荘だ。
「「すごい……!!」」
思わず声を漏らしたのは私だけではなかった。蓮さんも雪さんも、驚きと感動に満ちた目で

別荘を眺めている。けれど怜音くんだけは、少し冷めたような目をしていた。
「まあ、すごいのは俺じゃなくて親だけどね」
ひんやりとした声にどうリアクションしたらいいか分からなくて、私は口を閉じてしまった。
確かに、この別荘は怜音くんのものじゃなくて怜音くんの親のものだもんね。
もしかして、あんまり親と上手くいってないのかな……？
怜音くんは別荘から目を逸らし、口を開いた。
「俺の両親、二人とも医者なんだよね。しかも、父方の祖父が開業医なんだ」
「……もしかして早瀬って、早瀬の弟？」
そう言ったのは、たぶん雪さんではなく優斗くんだった。
変身した姿でいる間は、普段の自分ではなく『放課後変身部の自分』として振る舞う。それがこの部活のルールではあるけれど、素が出てしまうこともある。
「えー、両方早瀬じゃ分かんないな？」
怜音くんは急ににやにやした顔になって、雪さんとの距離を詰めた。
「俺のこと怜音って呼ぶんだから、早瀬葵のことも、葵って呼んで？」
怜音くんは雪さんの顎を右手で軽く持ち上げ、首をほんの少し傾けて笑った。

一度だけ溜息をつき、雪さんはちょっとだけムッとした顔で早瀬くんの名前を呼んだ。
「……葵って、早瀬杏の弟なの？」
「正解。まあでも、そんなことより早く中入ろうよ」
あっさり流して、怜音くんは鞄から鍵を取り出した。ちなみに駅からここまで歩く間、怜音くんは雪さんの分の荷物も持ってあげている。
中へ入ると、外観からイメージした通りの綺麗な内装だった。
玄関の先にあるのは広いリビングで、その奥に二階へ続く階段がある。リビングには大きなテーブルと座り心地のよさそうな革のソファーが置かれていた。
「とりあえず、部屋に荷物置く？　二階は二部屋あるから、奥が俺と雪ちゃんで、手前がももちゃんと蓮くんね」
荷物を持って階段をのぼる。
荷物が片付いたらリビング集合で、と雪さんと怜音くんの二人と別れた。
私と蓮さんの部屋はかなり広い。寝る時は布団を敷く予定だけれど、二人分の布団を敷いてもかなりゆとりがありそうだ。鏡台も設置されているから、メイクをしたり髪の毛を結んだりする時も便利だろう。

荷物を整理していると、蓮さんが私の肩を叩いた。
「ねえ、ももさん」
「なーに？」
「早瀬杏さん……って、ももさんも知ってる？」
「うん。三年の先輩だよ。でも、早瀬くんのお姉ちゃんだとは知らなかった」
早瀬杏。校内では結構有名な女子生徒だ。
苗字が一緒だなと思ってたけど、早瀬くんとはイメージが違いすぎるから二人が姉弟だとは想像したこともなかった。
杏先輩は、真面目で成績優秀な優等生。
明るく爽やかな早瀬くんとは違って、落ち着いた雰囲気の人だ。
「……もしかしてあんまり、姉弟仲がよくないのかな？」
「どうだろう。実はもも、塾も一緒なんだけど、話したことはないんだよね。っていうか、杏先輩が学校でも塾でも誰かとしゃべってるところ自体、ほとんど見たことないんだけど」
二人は明らかにタイプが違うし、早瀬くんは今まで全く杏先輩の話をしていない。さっきだって、さらっと話を流した。

断定するのはまだ早いかもしれないけれど、二人の関係は良好とは言い難いのかもしれない。
私と蓮さんが顔を見合わせていると、一階から『まだー!?』という怜音くんの大きな声が聞こえた。
「とりあえず、行こうか」
「うん！」
予定ではこの後、近所のスーパーに買い出しに行くことになっている。あまり遅くなると危ないし、のんびりしている暇はない。
私は蓮さんと一緒に、急いでリビングへ向かった。

第二章　恋と友情って、違うもの？

「買う物って、明日のバーベキューの材料と、今日の夕飯の材料だよね？」
スーパーに向かいながら確認する。早瀬くんの別荘には水やお茶などの飲みものは置いてあったけれど、食材はなにもなかった。だから、必要な分は今日買わないといけない。

残していくと腐っちゃうから、食べる分だけ……って、結構難しいかも。
お母さんと一緒にスーパーへ行くことはあるけれど、献立を考えながら自分で商品を選んだことはない。
それに料理も、家庭科の授業でしかやったことないんだよね。
「うん、あと朝食も必要じゃないかな。そういえばみんなって、朝は食べる？」
そう聞いてくれたのは怜音くんだ。
「ももは基本的には朝も食べるかな。パンを食べることが多いかも」
「僕はヨーグルトだけとか、スープだけとかが多いかな」
「……私は基本的に食べないわね。朝は苦手だから」
三者三様の回答だ。
三人が怜音くんに視線を向けると、怜音くんはまた違った答えを口にした。
「俺は結構がっつり食べるかな。白米、焼き魚、お味噌汁……みたいな」
ばらばらすぎて、つい笑ってしまう。
でもなんか、私達らしいかも。
話し合った結果、朝ご飯は簡単なものを作ることにした。そして、今日の夕飯と明日の朝食

の材料を選ぶグループと、バーベキューの材料を選ぶグループに分かれる。
私は蓮さんとバーベキューの食材を選ぶことになった。
「バーベキューといえば、やっぱりお肉だよね！」
ということで、まずはお肉のコーナーへ向かう。
バーベキューをする客が多いからか、いろんな種類の肉が置かれている。
蓮さんがちらっと私を見る。いたずらっぽい笑顔だ。
「ももさん」
「なーに？」
「バーベキューといえば、とにかくお肉だよね」
目を輝かせながら、蓮さんが大量のお肉をカゴへ入れていく。
ちょっと買いすぎな気もするけど……まあ、きっとなんとかなるよね！
「ねえ、蓮さん。マシュマロも買わない？」
「マシュマロ!?　いいね！」
大量のお肉とマシュマロでいっぱいになったカゴの中に、少しだけ野菜を入れておく。
去年の夏休みは、塾の夏期講習以外ほとんど予定がなかった。そんな私がこんなに楽しい夏

休みを過ごせるなんて、なんだか夢みたい。
別荘に戻った私達は、早速夕飯作りにとりかかることになった。
作るのはオムライスと野菜スープ！
私は蓮さんと一緒に野菜スープを作ることになった。台所に移動して、調理器具や食材の準備を始める。
「も、ももさん、包丁って持ち方、これで合ってるかな？」
「ちょっと蓮さん!?　そんな握り方じゃ危ないよ!?」
蓮さんは、まるで棒を握るように包丁の持ち手を握っていた。
顔が格好いいから絵になっているけれど、冷静に考えるとまずい。
「危ないから、一回包丁置いて!!」
「そうかな？　僕としては、結構自信があるんだけれど」
「その自信どこからくるの!?　顔!?」
まあね、とでも言うように微笑んだ後、蓮さんが包丁をまな板の上に置く。
その瞬間、カウンターの反対側から焦った怜音くんの声が聞こえてきた。
「雪ちゃん、お願いだから包丁俺にちょうだい!!　危ないことは全部俺にやらせて!?」

振り向くと、蓮さんと同じポーズで包丁を持っている——というか、振りかぶっている雪さん。
どうやら如月従兄妹、揃いも揃って料理が苦手らしい。
雪さんは、怜音くんに止められてちょっとムッとしている。
「……私だって料理くらいできるんだけど」
「うんうん、でもほら、俺が全部やってあげるし。雪ちゃんは無理なんてしなくていいから」
「そう？　花嫁修業の一環だと思うのだけれど」
ぼそっ、と雪さんがそう言った途端、怜音くんが胸のあたりをおさえて床にしゃがみ込んだ。
雪さんはすぐにそんな怜音くんから目を逸らし、勢いよく鶏肉を切り始めた。
雪さん、怜音くんのことからかいすぎじゃない!?
「ねえ、ももさん」
「どうかした？」
振り向くと、蓮さんはじっと二人を見つめていた。にやけた口元は、蓮さんというより姫乃という感じがする。
「あの二人、どう思う？」

「どうって？」
「本当に付き合っちゃったり……しないかな？」
蓮さん――というか、姫乃がそう考えるのも無理はない。二人はすごく仲がいいし、早瀬くんの好意は優斗くんにもがっつり伝わっているのだから。
実際のところ、優斗くんって早瀬くんのことどう思ってるんだろう？
好きか嫌いかで言わなくたって当然好きだろうけど、でも、それって恋愛の好きなのかな。
それとも優斗くんは、友情の好きなのかな。
二人をじっと観察してみても、心の中なんて覗けるはずがなかった。

「「「いただきます！」」」
全員で手を合わせ、完成したばかりの夕飯を食べ始める。オムライスは鶏肉をたっぷり入れたケチャップライスで、野菜スープはコンソメをベースにしたもの。



どちらもレシピサイトを見ながら見様見真似で作ったけど、ちゃんと美味しかった。
それに、自分達で作ったから、なんだかみんな楽しそうだ。
「雪ちゃんと俺の愛の結晶、美味しいね」
「変な言い方しないでくれる？」
「ロマンティックな言い方だよ」
「……なんかちょっとダサいけどね」
「雪ちゃんひどっ!!　そういうとこもだーい好き」
軽いノリに応じながらもアピールは欠かさない。怜音くんって、やっぱりすごいなあ……

☆★☆★☆★☆★

夕飯の後は順番にお風呂に入って、そのまま眠ることになった。
じゃんけんの結果二番目にお風呂を済ませた私は、部屋でごろごろしながら姫乃を待つ。
お風呂に入ったから、当然『もも』はおしまい。寂しいような、気楽なような……
いつもの私でも、もうちゃんと自分の気持ちを伝えられるようになったんだよね。

特に変身部のみんなが相手なら、以前のように『委員長らしくしなきゃ』なんて思わない。
私は私だ。
しばらくすると、姫乃が部屋に戻ってきた。お風呂上がりなせいで白い頬が赤くなっていて、かわいい。
目が合うと、えへ……と少し照れたように微笑む。
「おかえり」
「うん、ただいま」
起き上がると、姫乃はすぐに隣に座ってきた。
「ね、ねえ、望結」
「どうかした？」
「合宿の夜といえば、恋バナ！　じゃない……!?」
姫乃の目がキラキラしている。テンションが上がっているのが分かりやすい。
確かに、アニメとか漫画とかだと、よく合宿とか修学旅行の夜に恋バナしてるよね。
私は今まで、友達に恋バナを振られることはほとんどなかった。たぶん、『真面目な委員長・天野望結』は恋バナになんて興味がないと思われていたんだろう。

でも別に、そういうわけじゃない。
「うん。じゃあ、してみる？　恋バナ」
「し、してみたい……！」
本来、こんな風に話し合って始めることでもないのかもしれないけど、これはこれでいいよね、私達らしくて。
姫乃はなぜか髪の毛を整えながら緊張した様子で口を開いた。
「望結って、彼氏とかいたことあるの？」
「ないよ。姫乃は？」
「私もない」
お互いに顔を見合わせる。
……早速、恋バナの雲行きが怪しい。
気を取り直して、今度は私から質問した。
「じゃあ、好きな人は？」
「……できたことない、かも。望結は？」
一瞬目を閉じて、小学校低学年くらいからの記憶をさかのぼってみる。

好きな人、というワードに反応して思い浮かぶ相手はいなかった。
「私も……いない」
沈黙が部屋を支配した。
恋バナをしようと盛り上がっておいて、これでいいのかな、私達。
そこで、姫乃がハッとした表情になる。
「あっ、だったらその、ちょっと前から考えてることなんだけど……」
「なに!?」
このままでは恋バナが終わってしまう、と焦っていたから、前のめりになって姫乃の話を聞く。
「望結は『友達としての好き』と、『恋愛としての好き』の違いってなんだと思う？」
とっさに答えられなくて、私は口を閉じてしまった。
『友達としての好き』と、『恋愛としての好き』。
確かに、その違いってなんなんだろう？
相手が異性だったら『恋愛としての好き』？　なんて、簡単なわけないよね。それに早瀬くんは、雪さんの正体が男子だって知っても気持ちが変わらなかった。

「……独占欲がある、とか？」
恋愛漫画から得た知識を言ってみる。だいたいのヒーローは、ヒロインに対して独占欲を持っていて、『他の男とあんまり仲良くしないで』とか言っていた気がするから。
「確かに。でも、友達相手にも独占欲、感じちゃうことない……？」
「それは……ある、かも」
雪さんの正体が優斗くんだって知るまで、私は二人の仲の良さにもやもやしていた。
私は姫乃と仲良くなりたくて、私の知らない姫乃を知っている雪さんが羨ましくて……
あれは、独占欲みたいなものだったんじゃないかな。
「……恋愛って、難しいね」
姫乃は呟くと、はあ、と溜息をついて布団に横になった。
私も隣に寝転んで、並んで天井を見上げる。
私は今まで、誰かを恋愛的な意味で好きだ、と思ったことがない。つまり恋をすれば、私は初めての感情を知ることになる。
初めて味わう感情なのに、それが恋だとどうして分かるんだろう。
「ねえ、姫乃……って、もう寝ちゃった？」

横を見ると、姫乃は目を閉じてすやすやと眠っていた。時計を見たら二十一時。
まだ早い時間だけれど、疲れていたのかもしれない。今日は慣れないところにきて、慣れないことをしたわけだし。
そっと掛け布団をかけてから、音を立てないように起き上がる。
眠ってもいいんだけど、ちょっとだけ喉が渇いたから。
静かに部屋を抜け出し、一階のリビングへ向かう。誰もいないかと思っていたのに、優斗くんがソファーに座ってぼんやりしていた。
なにか、考え事でもしてるのかな……？
もしかしたら、優斗くんは一人になりたかったのかもしれない。だけど、声をかけてみることにした。
せっかくの夏合宿。優斗くんとだって、もっと仲良くなりたい。
「優斗くん」
名前を呼ぶ。
ゆっくりと振り向いた優斗くんの顔は、やっぱり悩んでいるみたいだった。
「天野か」

「はい。なにかあったんですか？」
変身部の姿の時は敬語なんて使わないけれど、今は普段の天野望結。
先輩の優斗くんには、自然と敬語が出る。優斗くんは迷ったように一瞬黙り込んだ後、小さな声で話し始めた。
「明日、海だなと思って」
「……海、実は嫌だったんですか？」
優斗くんは答えてくれない。
返事を急かすのは違うな、と思って、私は優斗くんの隣にそっと座った。
数秒の沈黙の後、優斗くんが言葉を続ける。
「なあ、天野」
「はい」
「早瀬って、マジで俺のこと好きだと思う？」
「えっ……!?」
予想外の質問に目を丸くしてしまう。早瀬くんは優斗くんのことが好き。当たり前の事実すぎて、疑ったことなんてなかったから。

「ぜ、絶対、そうだと思いますけど……」
どうして優斗くんは今さら、そんなことを疑問に思っているのだろう。早瀬くんは毎日のように、本人にも私達にも、優斗くんが好きだと公言しているのに。
ここまでして思いが通じていないのは、早瀬くんが不憫だ。
じっと顔を見てしまうと、優斗くんは少し苦い顔になった。
「……あいつ、結構空気読むし、周りのノリに合わせるだろ」
「それは、はい」
「だから俺とのことも、最初のノリが続いてるだけじゃないのかってたまに思うんだよな。好き好き言ってくるけど、ガチなトーンで正式に告白されたのって、最初の一回だけだし」
――最初の告白。つまり早瀬くんがまだ、雪さんの正体を知らなかった時のことだ。
私から見れば、早瀬くんが優斗くんを好きなのは明らかで、そこに疑いの余地はない。だけど、優斗くんから見れば別なのかもしれない。
「……それに、なんか壁を感じるんだよ」
吐き捨てるように呟くと、優斗くんはいきなり立ち上がった。
はあ、と溜息をついて、おやすみ、と部屋へ戻っていく。

優斗くん達、大丈夫かな……？

第三章　合宿が終わっても

「水着姿の優斗くん、超可愛い!!　写真撮っていい!?」
「別にいいけどそのテンションでこられるのは嫌だわ」
「えっ、ごめん、でもだって優斗くんが可愛くてさあ……!!」
着替え終わって姫乃とビーチへ行くと、先に着替えを終えた二人が大はしゃぎしていた。
二人とも、学校用のスクール水着じゃなくて普通の水着姿だ。
優斗くんはミントグリーンのラッシュガードも羽織っていて、水着のわりに露出は少ない。
ちなみに私は白いワンピースタイプの水着で、姫乃は黒いワンピースタイプの水着だった。
「ねえ優斗くん、こっち見て？」
満面の笑みを浮かべた早瀬くんが、優斗くんに向かってスマホをかまえている。
優斗くんが嫌そうな顔をしつつピースサインを作ると、可愛い!!　と早瀬くんはまたはしゃ

いだ。
優斗くんは昨日、早瀬くんが自分を本当に好きか分からない、なんて言っていたけど、どう見ても猛烈なアピールを受けているようにしか見えない。
それに、優斗くんを見つめる早瀬くんの眼差しは激甘だ。
「……二人とも、全然私達に気づかないね」
呆れたように姫乃が呟く。
だね、と頷いてから、おーい、と二人に声をかけた。
委員長、如月さん！　と声だけは元気に反応したけど、早瀬くんの視線は相変わらず優斗くんだけに向けられている。
こんな状態なのに壁を感じるって、優斗くん、どういうことなんだろう……？
昨日の優斗くんを思い出してもやもやしていると、二人が駆け足で近寄ってきた。
「どうする？　俺と優斗くん、ちょっと泳いでこようかなって思ってるんだけど」
「……わ、私、実は泳ぐの苦手で……」
姫乃が答えると、そうなんだ、と早瀬くんがあっさり頷いた。こういう時、早瀬くんは大きなリアクションをとらない。明るくノリがいいだけじゃなくて、早瀬くんはかなり気遣いがで

きる人だ。
そのことは私だって分かっている。だけどやっぱり、早瀬くんが周囲を気にして『優斗くんを好きなふり』を続けているとは思えない。
「じゃあ、私と姫乃はビーチで遊ぶので、二人は泳いできたらどうでしょう？」
優斗くんを見ながらそう提案する。
優斗くんはすぐに頷いて、早瀬くんの手をとった。
「行くぞ」
「わっ、優斗くんから手繋いでくれた」
ハートマークがつきそうなぐらい甘い声。優斗くんがパッと手を放したけど、すぐに早瀬くんが繋ぎ直す。
「あっ、顔赤い。ね、恋人繋ぎにしちゃお？」
なんていちゃいちゃしながら、二人は海に向かって歩いていった。
私と姫乃はそれを見送ってからつぶやいた。
「あれでまだ付き合ってないの、おかしくない？」
「うん、おかしいと思う」

私達に見えている早瀬くんと、優斗くんに見えている早瀬くんは違うのだろうか。
それとも、優斗くんの考え方の問題？
謎すぎて、二人のことを考えていると頭が痛くなってきた。
……でも、今目の前にあるのは青い空と青い海。潮の香りもして、身体の奥からわくわくしてくる。
「とりあえず、私達も楽しまない？」
泳げなくても、ビーチを楽しむ手段はいくらでもある。うんっ！　と頷いた姫乃と一緒に、私は砂浜でお城を作って遊ぶことにした。

「……できたね」
「うん、完成」
私達は見つめ合って、お城を壊してしまわないように、そっと小さくハイタッチをした。
どうせなら立派なお城を作ろう！　と決めてから約二時間。
なんとか西洋風のお城を作ることに成功した。窓や屋根もこだわって、自分で言うのもなんだけど、かなり上手にできた。

海といえば泳ぐことだと思ってたけど、こうして砂浜で遊ぶのも楽しい！
それもきっと、姫乃と一緒だからだよね。
「……このお城、持って帰れたらいいのに」
私がぼそっと呟くと、姫乃は小さなバッグから一台のカメラを取り出した。
大がかりなやつじゃなくて、小さなフィルムカメラ。
たぶん、撮った写真がすぐに出てくるやつだ。
「このままは持って帰れないけど、写真に撮って持って帰るのはどう？」
「カメラ、持ってきたの？」
「うん。その、合宿が楽しみで。たくさん、一緒に思い出を作れたらなって思ってたから」
照れくさそうに微笑みながら、姫乃は砂の城を二回撮った。
シャッターを切ると、すぐにカメラから写真が出てくる。
姫乃は写真を見比べて、綺麗に撮れた方を渡してくれた。背景には青空や砂浜、そして海も少し写っていて、まるで今この瞬間を切りとったみたい。
わあ、とつい声を漏らすと、姫乃が私の肩にそっともたれかかった。
「ねえ、望結。お城の前で、ツーショットも撮らない？」

蓮さんの時と比べると、姫乃は引っ込み思案でおとなしい。だけど私には、こうやってやりたいことを伝えてくれるようになった。

――私は、それがすごく嬉しい。

「うん、撮りたい」

お城がちゃんと写るように、姫乃といろんな角度と立ち位置で写真を撮った。綺麗にお城が写ることを優先したせいで、私達の写りは散々だ。

でも私は、きっとこの写真を一生大事にすると思う。

海で遊んだ後、私達はバーベキューの前にシャワーを浴び、変身部の姿になった。

後でもう一度お風呂に入らなきゃいけなくなるのは大変だけれど、やっぱり変身部の合宿として、最後の夜はちゃんと変身したかったから。

別荘の庭にバーベキュー用のコンロを設置して、昨日買っておいた食材を焼く。

バーベキュー自体久しぶりだし、友達だけでバーベキューをするのは初めてだ。

「合宿、あっという間だったね」

カルビを焼きながら、怜音くんがしみじみと呟く。

自然な動作で、怜音くんは焼き立てのカルビを雪さんの取り皿に置いた。

「どうぞ、雪ちゃん」

「ありがとう」

当たり前のような態度で、雪さんがお肉を口に運ぶ。幸せそうに口元を緩めた雪さんを見て、怜音くんがすごく嬉しそうに笑った。

「ももさんも、もっと食べたら？　おすすめはこれだよ。僕がももさんのために焼いたから」

顔を上げると、蓮さんが焼けたばかりのイカを皿の上に置いてくれた。

「岩塩をかけてみたんだ」

蓮さんが楽しそうに笑う。

早速口の中に入れてみると、予想していた五倍はしょっぱかった。

「〜〜〜っ!?」

これは、かけすぎじゃない……!?

「どうかな、ももさん？」

蓮さんがこっちを見つめる。

本音を言えば、しょっぱすぎる。だけど、甘い蓮さんの笑顔を見ながら食べると、ちょうど

いい気がしてきた。
「美味しいっ！　さすが蓮さん！」
とりあえず大袈裟に褒めてみる。すると蓮さんは満面の笑みを浮かべて、再びイカを網の上に置いた。
「まだまだあるから、いっぱい食べてね」
もう大丈夫……なんて、言える空気じゃない。
「うんっ！　そうだ、もも、飲み物追加で持ってくるねっ！」
そう言って私は、ジュースを取りに家の中へ一度戻った。
楽しい時間はあっという間で、いつの間にか用意した食材を全て食べ終わった。
でも、まだこれで終わりじゃない。
「みんなちょっと待ってて！」
簡単に片づけを済ませた後、みんなにそう伝え、急いで部屋の中へ戻る。
実はみんなのためにデザートの材料を用意しておいたのだ。
使うのはバニラアイスとココアビスケット。そして、トッピングの桃。
砕いたココアビスケットとバニラアイスを混ぜ、その上に切った桃を置くだけの簡単なレシ

ピだ。
人数分用意して、お盆に載せて庭へ戻る。
「お待たせ！　もも特製、スペシャルももアイスだよっ!!」
真っ先に反応してくれたのは雪さんだった。
きらきらと目を輝かせ、立ち上がって駆け寄ってくる。
「ありがとう、もも」
「どういたしましてっ！」
他の二人も、美味しそう、と言いながらアイスを受け取りにきてくれた。
お腹いっぱいだって言ってたけど、やっぱり甘い物は別腹だよね！
スプーンですくってアイスを口の中に入れる。さっきまで温かいお肉を主に食べていたから、急な冷たさに少しだけ頭が痛くなってしまった。
だけど、やっぱり美味しい!!
夢中になってアイスを食べる。食べ終わる頃にはもう、完全にお腹いっぱいになっていた。
いくら甘い物だとしても、もうこれ以上は絶対に入らない。
「お腹いっぱい……」

呟いて、お腹を押さえながらぼんやりと空を見上げる。バーベキューを始めた頃はまだ明るかったのに、すっかり暗くなってしまっていた。

星空はとても綺麗だけど、今日の終わりが近づいている証拠だと思うと悲しくなる。

……もう、明日には帰らないといけないんだよね。

「もも、寂しいな」

合宿が決まってから、ずっと楽しみにしていた。だから、終わってしまうのが寂しい。

つい俯いてしまうと、そっと手を握られた。

顔を上げると、蓮さんが優しく微笑んでいる。

「まだ合宿は終わってないよ」

蓮さんが雪さんに目で合図すると、雪さんは別荘の中に戻っていった。

そしてすぐに紙袋を持って戻ってきた。

紙袋の中を覗き込むと、中には大量の花火が入っている。

「みんなでしようよ」

「みんなでしない？」

花火なんていつぶりだろう。終わりに向けて沈みかけていた心が、急にふわっと浮き上がった。

「蓮さん、雪さん、ありがとう！」

二人のおかげで花火ができることはもちろん嬉しい。でもそれ以上に、二人が今日のために花火を用意してくれたことが嬉しい！

怜音くんも「なになに！」と言いながら笑顔で近寄ってくる。

そして、小さな花火大会が始まった。

手持ち花火に火をつける。

パチパチ、と火花が弾けて、暗闇に花が咲いたみたい。

「わっ、これ、結構激しいわね……!?」

びっくりした雪さんが、不安そうに怜音くんに近寄る。大丈夫だよ、と笑う怜音くんの手にも、おそろいの花火があった。

蓮さん達が用意してくれた花火のパックには、二種類の花火が入っていた。パチパチ、と弾けるスパーク系の物と線香花火だ。私達はまず、スパーク系の花火で遊ぶことにした。

一つ一つの燃焼時間は四十秒くらいで、火をつけると急にパチパチと音がする。

「そうだ。写真撮ろうよ」



蓮さんがカメラを取り出す。慌ててみんなが、カメラに花火がおさまるように移動した。

――パシャッ。

「綺麗に撮れた」

満足そうな蓮さんが見せてくれた写真には、花火がくっきりと写っている。家に帰った後、この写真を見てきっと懐かしい気持ちになるのだろう。

「……こんなに楽しい夏休み、初めてだよ」

カメラをしまいながら、蓮さんがしみじみと呟く。

私だって同じ気持ち。

ちょっと寂しくて――悲しい。でもきっと、ももなら――

私は笑顔をつくって、蓮さんの手を握った。

「蓮さん。夏休みはまだ、始まったばっかりだよ。も達と一緒に、もーっと楽しい夏休みにしちゃお!!」

合宿は明日で終わり。楽しくて非日常なイベントは終わってしまうけれど、私達の夏休みはまだ始まったばかりだ。

日常に戻っても、みんなとならきっと、たくさん楽しい思い出を作れる。